

小さなおしゃべり



当事者語りの研究会 ニュースレター 創刊号

2022年5月1日・Vol. 1

「これからの姿を楽しみに」

会長 梓川一

静岡英和学院大学



当事者語りの研究会～悠久～、会長の梓川です。

2022年4月から研究会はスタートしました。日本保健医療行動科学会、第34回大会(奈良大会：2019年)にて「当事者を感じ、語ろう」をテーマに開催しました。そのときの運営委員会メンバーが、その後約2年半の間、熱い思いを持ち続けて、じっくりと着々と研究会の設立準備を進めてきました。

私は、この研究会が研究の範疇におさまらないことを期待しています。社会に発信すること、社会貢献をすることを目指していきたいのです。最近、多様な地域生活課題を抱えて生きにくい社会とも、社会的な包摂を目指して共生社会のことも言われます。人それぞれに思いをもって、その人らしい生活を営んでいると、社会での通じあいが難しいこともあります。その人のことは、その人でなければわからないこともあります。その人に代わることはできないという考え方もあります。けれども、何かで支えあうことができたり、どこかでその人のために向きあうことはできるかもしれません。人それぞれの多様性を尊重しあいながら、人はいつの間にか、互いの人生を歩んでいるのかもしれない。

この研究会のテーマの一つであるナラティブ（人生の物語）の意味を、今一度、地域社会の中で、人と人との関係性の中で、一人ひとりの心の中で、改めて噛みしめてみるのもいいんじゃないかなと思います。人はそれぞれに人生を歩んで、人はそれぞれの生き方をして、それがどうにもならないままに生きていることもあったり、それゆえに自分らしく生きることができなくなることもあったり、そしてまた人は生活を続けているのかもしれない。そうした地域社会生活で、人々の心の中で、多様に存在している生き方とか、心情とか、ある苦悩とかを、この研究会で通じあえる・考えあえる場にもなり、それがあえる支えあいや社会貢献にもつながることを望んでいます。

当事者は、当事者でいるだけでなく、自ら当事者になっていくことも、時にはこんな生き方もいいのではないかと思います。自身の心の世界から発信をしていく、そうすると、少しアクティブになってくる、新しい出会いもある、お互いに支えあっていく、そこから社会貢献につながっていくこともあります。

互いのナラティブを尊重しあい共有するとき、心しておいたほうがいいことがあります。目の前の方に向きあい、語りを聴き、受け入れていくことであり、そこからナラティブは新たに展開していきます。言い換えますと、自分のことを主張するよりも、相手のことを認めていくところに、ナラティブゆえの当事者的生き方があります。

人間と人間、人と人との関係性において、ゆったりと曖昧なままでいいのです。何も厳密に物事を正さなくてもいいのです。そして、日常的な会話をしつつ、心にはゆとりとあたたかさ、そしてユーモアがあればいいのです。

なので、これからこの研究会が、どのような姿やスタイルになるのか、実は私にはわかりません。だから、いいのです、だから、魅力的なのです。私は、終着駅が決まっているレールの上を走りたくはありませんね。何かの・誰かの真似をして同質性に安心することも、オリジナルな自己の世界（ナラティブ）を大切にしていないですね。いつも自分らしさを求めていくことです。皆さんで、これからのことを、がやがやと話したり、いろんなことを考えたり、そこからできあがってくる「これからの姿を楽しみに」しています。産声をあげたばかりの研究会を、皆さんとともに、自由なムードで創り続けたいのです。

こんな研究会に、ふと立ち寄るのもあり、そこで座れる居場所を見つけるのもあり、そしてお互いそのまま経過して、支えあう経験を重ねて、少し人間っぽく生きてみることも、結構いいものです。。。

今後とも、当事者語りの研究会～悠久～を、どうぞよろしくお願いいたします。

設立総会開催

当事者語りの研究会の発足

2022年4月1日（金）

「当事者語りの研究会～悠久～」の設立総会を開催いたしました。

第1号議案 規約の制定（案）について

第2号議案 役員を選任（案）について

第3号議案 令和4年度事業計画（案）について

第4号議案 令和4年度活動予算（案）について

令和2年2月15日に第1回目の本会設立準備委員会を開催して以降、令和4年3月18日まで、本会設立に向けて約2年間に計20回（臨時会議含む）の会合を重ねてきました。並行して、令和3年9月23日には第1回目の企画、「語りの企画、PR動画撮影」と令和4年1月14日には同じく「語りの企画」第2回目をオンラインにて開催しております。

会長、副会長をはじめとした役員10名で活動を開始してまいります。



第1回目企画の感想

～前半～

2022年1月14日（金）

ZOOM内にて「共感について」「それぞれが考える共感とは」「最近あった話」というテーマとして語りあいました。

自然にナラティブにつながるよう、自由を尊重し、一人10分程度で語っていきました。語ることの感想について、前半。後半と第二部にわけて掲載していきます。

会長 梓川一

（静岡英和学院大学）

このたびは、「語りをしてみよう」という語り体験の企画でありましたので、日常的なことを何か話してみようと思いました。私は、「最近あったうまくいかない話」を、その時の場面を思い出しながらお話ししました。話す内容も、話すスピードも、話す時間も、特に意識しないようにして自由に喋ってみましたので、ふだんのままで、気分はとても良かったです。改めて、皆さんにお話するという場面設定ではありましたが、私の話す内容が軽いものでしたので、一応はやや恐縮しました。。。ふだんであれば、家族内で笑いのネタにしているような内容を、改めて画面を通してお話しして、皆さんが聴いてくれることで、ついつい、調子に乗って喋ってしまい、ちょっと盛ってしまいましたが、お話をしているひとつひとつに、皆さんが反応してくれたおかげで、気持ちよくしゃべってしまった感じがします。画面を通してこちらを向いてくれている皆さんが、うなずきながら聴いてくれるというのはやっぱりいいですね。半分忘れかけてたようなことも、話をしながら思い出したり。。。あまり嫌な気分で過ごしてはいませんでしたが、その時のことも、そうそうこういうこともあったかなという感じで思い出せましたから、聴いてくれることの効果はあると感じました。日常的な何気ない一場面でしたので、どのような効果があったか？と言われると、私の中ではよくわから

ないのですが、聴いてもらえて、皆さんとこの場を共有できたことで、後々気持ちが良かったかなと思います。どこに落ち着くかもあまり考えずに話をしていく…、日常ではふつうにこういう話し方もするものでしょうし、日常にもこういう改めて語る場面ができて、聴いてくれる関係性があるといいなあと、改めて感じました。

役員 天野雅夫

（神戸親和女子大学非常勤）

今回は、「『最近、一番驚いたこと』についての語り」というお題でお話しをさせていただきました。初めての「語り」はこれでもかかったのでしょうか。そもそも「語り」とはどんな意味があるのでしょうか。古事記と日本書紀の違いのようなもの、あるいは平家物語と義経記のように一方は史実を物語にし、他方は年表のように表現するというのでしょうか。ビジネスの分野においては、ナラティブ・マーケティングというということも言われているようですが、もともとは、文学理論の用語であったものが、臨床心理学や医療において使われるようになったとのことです。そういったことも含めて、この研究会で学んでいけたらと思っています。

「『最近、一番驚いたこと』についての語り」

私は医者でも専門職でもないし、看護系でもないのになぜここにいるのか？とお思いかたもおられるでしょう。専門は環境教育、環境倫理など環境関係の授業や実践活動をしています。そこから、レクリエーションやウォーキングなどを企画しています。医療ではありませんが、健康促進のようなこともしています。今、私の背景に映っている田んぼですが、これは神戸の北区にある「あいな里山公園」というところですが、その公園の田んぼです。そこで、私がどうしてこの公園と関わるようになったか、どうしてウォーキングなんてことをするようになったかということ語りたいと思います。

この公園と関わるようになったのは2000年頃です。そこはもともと田んぼでした。放棄された棚田です。なので、まずコメを作ろうということになりました。そこはこれから公園になるところでしたので、自由、勝手気

ままに田んぼを修復してコメを作っていました。そうしたら、そこをたまたま散歩か何かで通りかかったおじいさんが二人おられて、こんなところで何をしてるんじゃ、と声を掛けられました。すると、そのおじいさんたちは、「わしらも仲間に入れてくれへんか」ということになり、一緒にコメを作るようになりました。そこで、コメを作りながら話をしていたら、「ここには昔『徳川道』というものがあつたんじゃ」、と話し始めました。

「徳川道」といえば、江戸時代に作られた道というようなイメージを持ちますが、少し違います。江戸時代はそうなのですが、実は幕末に作られた道です。それも1年ほどで廃道になってしまいます。西国街道というものがありますが、みなさんご存じですか？ まあ聞いたことはあると思いますが、京都から太宰府までを結ぶ道です。その西国街道、山陽道ともいい、これは神戸の海岸線のあたりを通っていますが、それができたのは奈良時代とかずっと昔です。時代は下って、幕末になり、神戸が開港します。その時に、大名行列と外国人が鉢合わせをしたという事件が、横浜の生麦村の事件は有名です。大阪の堺でもおこります。そこで、鉢合わせをしないように遠回りするための迂回路を幕府が作りまします。正式名称は西国往還道付替道といいますが、幕府が作ったので通称「徳川道」といいます。その道がこの公園の中を通っているのです。そこで、その道を歩いたり探したりしたわけです。

それから二年ぐらいは一緒にコメづくりをしていましたが、当時すでに80歳ぐらいの人でしたので、そのおじいさんはしばらくして亡くなります。でも、亡くなる少し前に「この徳川道のことを多くの人に知らせて欲しい」ということをおっしゃいました。確かに、崩壊する寸前ですが、徳川幕府が作った道ということで貴重な史料でもあります。なので、私は皆に伝えるようにしなす返事をしました。その後、しばらくしてそのおじいさんは亡くなります。だから、私はこの「徳川道を皆に広めろ」ということが彼の遺言のような気がして、この徳川道という財産を皆に伝えないといけないようになったわけです。それで、この公園、既に2016年に開園していますが、開園したときから歴史ガイド・ウォーキングということをするようになりました。今月（1月）も「鶴越道」というところを歩きます。これは、そのおじいさんの導きかもしれませんね。

その時に、そのイベントの冒頭でいつも紹介している本がありました。野村貴郎先生の『北神戸 歴史の道を歩く』という本です。歴史ウォーキングのときに最初15分ぐらい座学があるのですが、そのときに参加者にいつも紹介していました。この野村先生は武庫女の先生ですが、「北神戸の歴史はこの本を読めば分かる」と話していました。そうすると、この先生にお会いできるということになり、それが先月（12月）です。それで、お会いしに行きました。そうしたら、何と、私が開園以来おこなってきた歴史ウォーキングに、参加したことがあるというではないのですが、知らずに参加しておられたのですが、本当に驚きました。もともと地理が専門でしたので、歴史は素人のようなものですから、その時は驚いたと同時に、何とまあ恥ずかしい思いをしました。これが最近、一番驚いたことです。このような経緯で、このあいな里山公園で歴史ガイド・ウォーキングをしていますので、機会があれば、皆さん是非、参加してください。

役員 海道志保 (社会福祉協議会)

私は、「最近学んだ話」として、プレゼントに当選したけれど自身の欲に気づき反省したことについて語りました。当事者性や自身のこと、語りと全く関係のない話です。話す直前まで内容に悩みながら、「語る」とは何なのかと気になり、直前になって内容を変えてしまいました。

直前までは、「最近楽しかった話」とし、昨年半年間にわたる講習会に参加したことで、新たなことを知る楽しさや、語ることで深まる関係性を伝えたいと考えていました。本会テーマの一つでもある「語る」「学ぶ」だからこそ、メンバーの方々に聞いてほしい、受け止めてもらえたら嬉しいなと思っていました。

それが、どうして、関係のない話をしたくなったのか…、「語り」とは何かを知りたくなりました。語った感想としては、欲を改めて実感し反省。振り返ることはできましたが、この話をもう一度「語り」たいかとなると、コミュニケーションのための会話で話すので良いかなと。

じゃあ、「語り」とは何なのか。「語り」とは、改まった場で、話し手も聞き手も内容テーマを共通認識の上で「話す」ことなのか。さらには、話す内容なのか、場の雰囲気なのか、伝えたい思いなのか、話し方なのか、聞いてもらう方との関係性なのか。私自身の中で、まだ、よくわかっていません。

これから、当研究会を通じ、「語り」とは何かを考え、「語り」を受け止め学び、「語り」から得られるものを発信していきたいです。最後になりましたが、メンバー皆さんのお話を通じて、皆さんの考え方や生活を知ることができ、とても楽しかったです！

役員 川口美度理 (大阪南医療センター)

私は、親族から受けた相談のこと、それを受けて私自身が感じたことについて、話をしました。私は普段、医療ソーシャルワーカーとして従事しています。そのような背景もあり、たまに家族や知人から相談されることはありました。

今回は、身内からの少し複雑な相談でした。親族の立場として話を聴いていると、私が発した言葉が、それぞれの家族や、親族関係にも影響を与えてしまうことについて考え、言葉に詰まってしまいました。私の言葉が、私の家族関係にも影響するとなれば、感じ方もこのように違って来るのかと、考えさせられた出来事でした。また、「専門職ではない自分」を、「専門職である自分」から完全に切り離して考えることができないということにも、参加者の皆さんから共感が得られました。

話をしてみて、この今の自分の気持ちを誰かに聞いてほしい、感情を受け止めてほしいという思いがあったことに、話し終えてから気づきました。普段は、自分が語ることよりも聴くことの方が多いため、自分の話にしっかりと耳を傾けてくれる機会は、貴重であると感じました。自分の語りを、ありのまま受け止めてもらう経験は、受け止め方はそれぞれ異なると思いますが、何らかの形で有意義な経験になるのではないかと感じております。



編集後記

コラムのようなもの



役員 海道志保

ついに「悠久の会（勝手に略してます）」が立ち上がりました！どんな気づきがあるのか、何を発信していけるのかワクワクします。会発足のきっかけとなった2019年、健康障がい有する立場、家族の立場、専門職の立場、それぞれの立場の想いを知り、向き合いました。家族の立場の想いを初めて知り、泣きました。相手の立場を知り、理解しあうことで、良い関係性を築くことができると実感しました。突然ですが、お勧めの曲を紹介したいです、「人として（海援隊）」です。人と向き合うことを教えてください。

改めて、この領域は、「学ぶ」だけではなく、「（人を）知る」「踏み出す」ことの大切さを感じます。何よりこれらのアクションと並行して、周囲の方々に教わったように、楽しんだりワクワクしたりすることを大切にしたいです。と、尊敬する方が仰った大切にしている言葉です。これからよろしくをお願いします！

役員 杉本歩

児童福祉関連のお仕事につくようになってから、少しでも勉強になればと思い、虐待やシングルマザー関連の映画をよく観るようになりました。なので今日は映画紹介をしたいと思います。どれもprimeやNetflixやGYAOで観ることができます。ただ、休日の昼下がりにのんびりと観るような映画ではないので注意してご鑑賞ください★

○カナリア

「オウム真理教事件」をモチーフに描かれた映画。カルト教団に入信した母に連れられて、妹と共に教団の施設で育った12歳の少年。教団はテロ事件を起こして解散し、母は行方知れずになり、少年は児童相談所に預けられるが、祖父母に引き取られた妹を取り戻すために施設を脱走。その道中、援助交際をする少女と出会い、一緒に旅するようになる。

○誰も知らない

「巣鴨子供置き去り事件」がモチーフとなった映画。父親が異なる4人の兄妹と母の母子家庭。アパートを追い出されないために、父が海外赴任中で母と息子の2人暮らしだと偽って暮らす彼らは、そのため学校にも通ったことがない。

だが母親に新たな恋人が来て、兄妹に20万円を残して失踪、子供たちはなんとか自分たちで暮らしているとする。

○子宮に沈める

「大阪2児放置死事件」がモチーフとなった映画。幼い子供2人と暮らす、シングルマザーが労働、家事、育児に勤しむ。しかし、やがて直面する困窮、孤立、そして誘惑。母が逃避に陥ることで始まる、子供たちの悲劇。いかにして若い母親が、殺人者となったのか。児童虐待や育児放棄に切り込んだドラマ。学歴や職歴のないシングルマザーは社会から孤立し、孤独に追いつけられていく。

○kotoko

苦しみもがきながらも愛する息子を育て、懸命に生きるシングルマザーの姿を描き出した映画。世界が“ふたつ”に見える現象に悩まされ、歌っているときだけ世界が“ひとつ”になる。神経が過敏になり強迫観念にかられた母は、息子に近づくものを殴り、蹴り倒して必死に息子を守っていたが、幼児虐待を疑われて息子と引き離されてしまう。

○マザー

「川口祖父母殺人事件」がモチーフとなった映画。息子に異様に執着し、そんな母からの歪んだ愛に翻弄されながらも、母以外に頼るものがない息子。身内からも絶縁され、社会から孤立した母子の間には絆が生まれ、その絆が、17歳に成長した息子をひとつの殺人事件へと向かわせる。

お仕事中はなるべく当事者に寄り添い、相手の気持ちを理解し、その上で客観的な判断を考えるように努めていますが、どうしても自分自身の価値観や感情的な部分が滲んでしまうことがあります。しかし、こういった映画はエンターテインメントでありながらも、当事者の繊細な心理描写や世間の関心等をわかりやすく可視化してくれているので、いろんな切り口で社会問題について考察出来るツールであるとも感じています。洋画も邦画も好きですが、邦画の方が自分自身の生活に置き換えやすいので、リアルにどっぷりとストーリーに浸られますね。紹介した映画はほとんどバッドストーリーで、観ていると疲れてくるような内容のものばかりですが、是非ご興味くださいませ。